

「身体遊びマイスター」プログラム実践報告

— 身体表現指導の専門性を高めるための取り組み —

A Report of “Physical Play Meister” Program

— A Practical Attempt for High Expertise of Teaching Physical Expression —

松岡綾葉

MATSUOKA, Ayaha

キーワード：ダンス、身体表現、保育者養成

1. 緒言

本学では、保育者としての専門的な学びに加えて、ある特定の保育分野において「もうひとつの力」をつけるための実践的な学びのプログラム「宝仙マイスター制度」が設けられている。筆者は2017年度より「身体遊びマイスター」を担当し、ダンス・身体表現・運動遊び等の子どもの身体活動に関してより専門的な知識と技術の習得を目指した取り組みを行っている。¹

「身体遊びマイスター」プログラムは、4年生を対象とし、保育者として現場に出る前の最後の一年間を履修に充てる。

「もうひとつの力」をつけるということは、カリキュラムに取められている保育専門科目だけでは習得することのできない、身体遊びに関する実践知を積むことである。そこで、本プログラムのねらいとして、①様々な運動遊び・ダンスに触れ、自ら新しいアイデアを創出できるようにすること、②他者の様々な表現を受け入れ、表現の世界を広げること、③学外における現場経験を積むことで、実践的な指導力を身につけることの三つを設定した。

身体活動の中でも、身体表現の指導に関しては、増田・松岡（2017）²において、苦手意識を持つ保育者が多い現状が指摘されている。この苦手意識をなくし、身体表現指導の専門性を高めていくために、養成校にてどのような学びが必要なのだろうか。この研究の一環として2017年度・2018年度の本プログラムでは、子どもの身体活動の中でも身体表現に重点的に取り組んだ。

両年度の主要なプログラム内容は、

- a. 基本的なダンス技術の習得と様々な子ども向けダンスの体験
- b. リズムダンス創作の手法を学ぶ
(エアロビックダンスのステップからの応用)
- c. 創造的で自由な身体表現の指導法に触れる
(学外のダンスワークショップ見学)
- d. 身体表現を取り巻く音楽・衣装に関する実践的な学び
- e. 学外での保育実践
(ダンスワークショップにおける指導実践)

である。特に b・c は、保育者養成校の学生にとって「指導が難しい」というバイアスのかかりやすい活動内容で、養成校の学びにおける課題も多いため、本プログラムにて積極的に取り入れた。また、e の保育実践として学外にてワークショップ（以下、WS）を行ったが、これはマイスター制度が少人数で行うプログラムであること（受講学生数は2017年度5名、2018年度3名であった）や、本学独自の学びであることを生かした取り組みである。d では身体表現活動を取り巻く要素である音楽と衣装に焦点を当て、e の保育実践に活用することをねらいとした。以上、a から d までの学びとその集大成としての e の保育実践を設定し、プログラムを展開した。

本稿は、2017年度・2018年度の「身体遊びマイスター」プログラムにおいて、身体表現指導の専門性を高めるために行なった取り組みの実践報告（b・c・d・e について報告を行う）とその考察を行うものである。

2. 実践報告

1) リズムダンス創作の手法を学ぶ

(エアロビックダンスのステップからの応用)

ダンス創作の手法について、従来のカリキュラムの中で十分な習得は難しい。習い事や部活動でダンスを経験した学生たちも、踊ることは好きだが、ダンス創作となると難渋することがよくある。ましてやダンス未経験の学生にとってダンス創作はハードルの高い課題なのである。

しかしながら、保育現場の中では、行事等におけるダンス創作と指導は欠かせない。既存のダンスをそのまま使用するのであれば良いが、子どもたちの発達に応じて振付を新たに考えなければならない、あるいは規定の振付のない音楽に独自に振付をつけなければならないとき、ダンス創作の方法論が身につけていなければ、大いに困ってしまうだろう。

エアロビックダンスは、下肢の動き、つまりステップがベースとなり、そこに上肢の動きが加わって成り立つダンスエクササイズである。ステップには様々な種類があるが、専門的訓練をそれほど必要とせず初心者でも実践可能なものが多い。エアロビックダンスの振付は、ステップを年齢や習熟度に応じて組み合わせること(「コ

ンビネーション」と呼ぶ)で構成されている。つまり、各ステップを習得することで、エアロビックダンスはダンスの経験がなくとも踊ることができる。

本来は健康作りのために開発されたエクササイズであるが、「(筆者注:エアロビックダンスの)魅力は健康作りから自己実現・自己表現へ変化する」³⁾ことが明らかとなっており、ダンスの情操の効果も兼ね備えた汎用性の高いエクササイズである。

これらのことに着目して、エアロビックダンスのステップを用いることで、ダンス経験の少ない保育者でも幼児のリズムダンス創作をより簡便に行うことができるのではないかと、松岡(2017)⁴⁾にてその有効性をはかった。この先行研究を鑑み、本プログラムでは、エアロビックダンスのステップを活用したリズムダンス創作を試みた。

ステップにはローインパクト(両足もしくは片足が必ず床に接地しているステップ)・ハイインパクト(両足が床から離れている瞬間のあるステップ)に分かれているが、先の研究で、幼児のリズムダンスにはハイインパクトを多用すると良いことが示唆された。プログラムで実践したエアロビックダンスのステップについては表1に示す。

また、ステップに加える上肢の動きを考案するにあ

表1 エアロビックダンスのステップを用いたリズムダンス創作における指導内容(松岡作成)

エアロビックダンスのステップ	<p>【ローインパクト】 マーチ、Vステップ、Aステップ、ステップタッチ、ランジアップ、レッグカール、ツイスト・シングル/ツイスト・ダブル、ヒールタッチ、サイドランジ、バックランジ、ステップツイスト</p> <p>【ハイインパクト】 ジョグ、ステップホップ、ケンケン、ポニー、ツイスト・シングル/ツイスト・ダブル、ヒールジャック、ヒールタッチ、フロントキック、サイドキック、ニーアップ、ジャンピングジャック、シザージャック</p>
上肢のつけ方	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞のイメージに合わせた手の動きを取り入れる ・リード足または移動の方向と同じ手を動かす ・上下運動を多用し、下肢と上肢が連動するようにする
コンビネーションの構成法	<ul style="list-style-type: none"> ・右リードのコンビネーションを作る ・ローインパクトとハイインパクトの配分を調整する ・難度を下げる場合は、ステップの動きをゆっくりとる ・子どもが日常的に行う感情表現に近いステップを取り入れる
振付以外の要素1:フォーメーション	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の間奏などを利用し、移動を行う(子どもにとって行いやすい移動は前後) ・その際はビニールテープ等を床に貼り、目印をつける ・立ち位置によって振付や動きのタイミングを変えてみる
振付以外の要素2:人との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・手を繋ぐ、電車つなぎになる、保護者や講師とハイタッチする等、人と触れ合う動きを作る ・じゃんけんを入れるなどゲームの要素を取り入れる
振付以外の要素3:自由な動きを加える	<ul style="list-style-type: none"> ・フォーメーション移動の際などに自由な動きで移動する ・自由なポーズを取り入れる

たつての観点、コンビネーションの構成法を伝えた。そのほか、フォーメーションの変化や、人との関わり、自由に動くところを作る等、子どもがよりダンスを楽しむために工夫できることを取り入れた。これらの内容の詳細についても表1を参照されたい。

WSにて使用したダンスに、エアロビックダンスのステップを用いて振付を行なった。受講学生は、多くがダンス経験者であったため、速やかにステップを習得した。しかし、ステップありきで創作するこの手法は上肢と下肢を分けて動きを考えることになるため、身体二元化が生じてしまう。そのため創作において、からだ全体の動きのアイデアが浮かんでしまい、ステップと上肢の動きに分けて考えることを難しいと受け止める受講学生がいた。

課題は残ったものの、エアロビックダンスと幼児のダンスを結びつけたこの学習を通して、ダンス創作への新たなアプローチ法を身につけることができたと考える。

2) 創造的で自由な身体表現の指導法

(学外のダンス WS 見学)

増田・松岡(2017)の通り、子どもが内面に描いたイメージを自由に表現する創造的な身体表現の指導に関して苦手意識を覚える保育者は多い。子どもの表現欲を引き出し、さらに子どもたちの表出された表現に広がりや深みをもたらす言葉かけや場作りに対する困難さを感じていることが理由である。

そのことから、身体表現活動ではどうしてもリズムダンスに傾いてしまうのであるが、そればかりでは子どもの情緒的活動の体験を狭めることになってしまう。

創造的な表現の指導に際しては、まず子どもたちにとっての表現活動は日常の中に常に起こっているものであり、子どもたちの日々刻々と変化する情動に着目する必要性を理解しなくてはならない。さらに、「身体表現指導は難しい」というバイアスを取り払うためには、保育者自身が根源的な表現欲を持ち、身体を解放することができるようになることが肝要である。

子どもの心を揺り動かし、身体へと表出させてゆく創造的な指導については、実践的な学びの場数を踏んでいくことが必要である。さらには、感性と身体知に優れている専門家による指導の現場に触れることで、大きな学びが得られると考えた。そこで、設けた機会が「ダンス保育園!!」見学である。

「ダンス保育園!!」とは、ダンス保育園!!実行委員会主催による「芸術祭やフェスティバルと連携し、子育て中のアーティストや観客を支援する活動」⁵で、子どもと保護者がともに楽しむことのできるダンスWSを年に数回全国各地で開催している。講師を務めるのは、第一

線で活動し、自らも子どもを持つダンスの専門家である。見学を行った「ダンス保育園!!」のWS概要を以下に示す。

【2017年度】

日程/2017年10月15日

会場/谷戸せせらぎ公園(西東京市)

時間/13:00-14:00 ダンスワークショップA

(講師:篠崎芽美)

14:15-15:15 ダンスワークショップB

(講師:黒須育海)

【2018年度】

日程/2018年10月7日

会場/ワールド北青山ビル(東京都港区)

時間/11:00-12:00(講師:篠崎芽美)

WSでは、講師の巧みな言葉かけと奔放な身体性によって参加した子どもたちを表現の世界に導いていた。子どもたちは、初めは講師の動きを手本として模倣していたが、やがて自身の発想による新しい動きをそれぞれ開発し、最後には全員で協同して一体化し、表現の楽しさ・喜びにあふれるものとなっていた。

また、「ダンス保育園!!」では音楽家も参加し、その場に合わせて即興的に音を奏で、歌を歌っていた。さらに会場内には美術作家によるオブジェも伴っていた。まさに音楽や美術も一体となった空間で行う密度の濃いWSとなっていた。

講師の動作や言葉かけ、表現する子どもたちの姿を目の当たりにしたことは、受講学生にとって得がたい経験であったと考える。この見学によって得られた学びから、後のWSの計画立案につながっていった。

3) 身体表現を取り巻く音楽・衣装に関する実践的な学び

保育の現場では日々の身体表現活動の他に、成果発表の場としての生活発表会や運動会等があり、これらは多くの保育施設において実施されている行事である。このような発表会に向けて子どもたちは日々練習を重ね、最終的に観客(その多くは保護者である)の前で披露をする。

このようなパフォーマンス実演の場は、日々の練習を通して子どもたちに表現活動への愛着を形成し、やりがいと達成感をもたらす。保育者にとっても、日頃の活動を発表会へと磨きをかけることで、子どもたちの表現力の可能性を探ることのできる貴重な機会である。

この非日常的なハレの場にふさわしくすべく、発表会には音楽や衣装、時には美術などの要素が必要となって

くる。これらの要素は、保育者が主体的に制作を行うことが多く、時には保護者の協力も必要とする。身体表現の発表会は、まさに総合芸術なのである。

本プログラムにおいては、身体表現が総合芸術となつてゆく過程を体験するため、行事における表現活動の実演を想定し(実際には、WSに生かすことをねらいとした)、身体表現を取り巻く音楽と衣装の要素についての実践的な学びの機会を設けた。

①音楽

特にリズムダンスにおいては、振付の起点・インスピレーションの源となるもので、非常に重要な役割を持つ。音楽を選定することはダンスそのものの方向性を決定づけることとなり、吟味して選ばなければならない。

本プログラムでは、まず音楽の選定方法について学びを深めた。発達段階や年齢に合わせた音楽のテンポの選定、子どもたちにとって親しみやすく心地よい音楽ジャンルを選ぶ必要があることを伝えた。また、子ども向け音楽以外のジャンルにも可能性があることを示した。音楽ジャンルに対しての知識や概念のない子どもが多様な音楽に触れることで、新たな表現が生まれる可能性があるからである。

次に、パソコンを用いて音楽の編集について学ぶ機会を設けた。現場実践の際は、音楽の長さを調整し他の曲とつなげる等、編集を要することが多々ある。編集技術を学ぶことで、より恣意的に音楽を駆使することが可能となるであろう。受講学生は音楽編集に対する興味を持っているものの、その手法についての知識はなかった。

その学習内容は、パソコン演習室にて音楽編集のフリーソフトをダウンロードし、受講学生の持参したCDやUSBから音楽を取り込み、編集を行うものである。カット編集やピッチの変化、音量の調整等の基礎的な操作について学んだ。

受講学生は、文書作成や表作成でもない、新たな作業の体験に慣れない様子が見られたが、単純なカット編集や音量調整を行い、ひとつの曲を作成した。しかしながら、当該内容は1時間分しか確保することができず、十分に編集を行う技術の習得には至らなかった。

②衣装

衣装の効果として、題材の世界観を視覚的にも楽しむことができる・題材との親和性を高め、表現世界により没入することができる・子どもたちは着用した衣装を持ち帰ることで思い出として残すことができる等が挙げられるだろう。動きに衣装を乗じることで、パフォーマンスの完成度を高めることができる。

本プログラムでは、WS内容に合わせた衣装作りを

行った。保育者は多忙な保育業務の中で衣装制作を行わなければならないことを想定し、簡便に衣装制作ができる「衣装ベース」を使用した。衣装ベースとは、あらかじめ製造業者によって作られた簡素なTシャツやワンピースやズボンなどのことである。不織布で製造されており、縫製を行う必要がなく切りっぱなしで加工することができる。また両面テープを用いれば他の素材と合わせることも可能である。

2017年度は、海賊をイメージした衣装(帽子、ベスト、ベルトにそれぞれ装飾をつけた)、2018年度はドラえものの衣装(ワンピースに四次元ポケットをつけるなどして加工した)を制作した。

受講学生は、初めは衣装制作と聞いて縫製をしなくてはならないのかと憂慮していたが、衣装ベースを素材とした衣装作りを実践したところ、その簡便さに驚いていた。

4) 学外での保育実践

本プログラムの集大成としての保育実践は、各年度に2回ずつ、外部組織または本学が主催する子ども向けイベントに参加するかたちでWSを行なった。各WSの実施概要を以下に示す。

【2017年度】

①なかのZERO こどもフェスティバル

(なかのZERO 主催)

タイトル:「表現の楽しさを知ろう! 3歳から楽しめる!

子ども向けダンス」

日時/2017年8月6日 13:00-13:50

会場/なかのZERO 西館3階 学習室4

参加費/500円

対象/3歳から小学校1年生くらいまでの子ども

参加児童数:11名

②なかの健康づくりフェスタ (中野区主催)

タイトル:「こども向けダンスワークショップ」

日程/2018年1月28日 13:10-14:00

会場/中野区中部スポーツコミュニティプラザ多目的
ルーム

参加費/無料

対象/3-5歳の子ども

参加児童数/25名

【2018年度】

①宝仙こどもフェスティバル (本学主催)

タイトル:「からだ遊びワークショップ・踊れなくてもいいじゃない」

日程／2018年11月18日 14:00-14:45
会場／こども教育宝仙大学 4号館421教室
参加費／無料
対象／幼児
参加児童数／31名

②なかの健康づくりフェスタ（中野区主催）
タイトル：「こども向けダンスワークショップ」

日程／2019年1月20日 13:10-14:00
会場／中野区中部スポーツコミュニティプラザ多目的
ルーム
参加費／無料
対象／幼児
参加児童数／25名

いずれのWSも主催団体が参加者を募集したが、わずか1日ないし数日で定員に達した。子ども向けのイベントにおけるニーズの高さをうかがわせた。

WSの内容は、受講学生とディスカッションを重ねながら大まかな構成を立案し、細かな指導内容については受講学生に委ね、適宜助言を行った。

各年度2回のWS実践を得たが、1回目のWSからの振り返りを受けて、2回目のWSでは内容の一部を改善している。そのため本稿では、各年度の2回目のWS内容を取り扱うこととし、表2に示した。WSで行った活動の中から特筆すべき取り組みを以下報告したい。

【2017年度】

①導入 「HipHop ダンス」

本プログラムでは、WSをどのようにして開始するか、その導入の方法について試行を試みた。

単発で行うことの多いWS形式では、講師・参加する子どもともにその日限りの関係性である。また、参加する子どもたちも互いに顔を合わせるのが初めての状態である。そのため講師の自己紹介は、WS冒頭の緊張感をブレイクするきっかけを担っており、きわめて重要な

表2 各年度2回目のワークショップ内容（松岡作成）

	2017年度	2018年度
導入	・講師（受講学生）自己紹介 「HipHop ダンス」 （講師は2分程度のダンスを踊り、子どもたちに見せる）	・講師自己紹介 「名前のダンス」 （講師は、自分の名前を紹介した後に、からだで名前を表現する短いダンスを踊る） ・手遊び「はじまるよ」
活動1	・音楽に合わせて体操を行う。 ・「あいうえおんがく」 まず講師による見本を見せ、その後振付の練習を行い、最後に音楽に合わせて皆で踊る。	・「みんなでたいそう」の紙芝居を読む。 ・紙芝居の中の体操を皆で行う。カスタネットや鉄琴、タンバリン等の音を入れてリズムをつける。
活動2	・動物の表現遊び まず講師のポーズのまねを行い、ポーズから動物のまねに切り替わる。 ・海の生き物の表現遊び 動物から海の生き物に題材を変え、保護者の協力ももらい、ビニールで作成した海を広げる。ビニールの海の下で海の生き物のまねをして遊ぶ。	・音遊び 紙芝居の体操を発展させ、動物の動きにつなげてゆく。 講師が動きの型を見せ、子どもたちは真似をする。動物をあらわす音を鳴らす。 ・ビニールの中での自由な表現 一度子どもたちを集め、講師が語りかける。その間にビニールを広げる。ビニールを上下に動かしたり、波のように揺らす中で、自由に動く。
休憩	休憩をとってもらおうと同時に配布した衣装を着用してもらおう。	休憩をとってもらおうと同時に配布した衣装を着用してもらおう。
活動3	・「ぼくらは小さな海賊だ！」 まず講師による見本を見せ、その後振付の練習を行い、最後に音楽に合わせて皆で2回踊る。	・手遊び「ちよきちよきダンス」 ・「夢をかなえてドラえもん」 まず講師による手本を見せ、その後振付の練習を行い、最後に音楽に合わせて皆で2回踊る。
まとめ	・子どもたちに感想を聞く ・どのダンスをもう一度踊りたいか聞いて、リクエストの多かったダンスを踊る（「あいうえおんがく」を踊った）	・子どもたちに感想を聞く ・講師が身体でトンネルを作り、子どもたちは電車つなぎになってくぐる。トンネルの形を次々に変えて、何周か回る。

ものになってくる。

また、ダンスのWSの講師は、保育者というよりもダンスの専門家、いわば「ダンスのおにいさん・おねえさん」として認知されるような存在であることが求められる。そこで、ダンスや身体表現に特化した導入を試みた。

2017年度の受講学生は、ヒップホップダンスの経験者が多く、ダンスの専門性があることを示す為に、2分程度のヒップホップダンスを子どもたちの前で踊るという導入を取り入れた。

②ビニールを使った表現遊び

見学を行った「ダンス保育園!!」では、大きな布を用いて、布の中に入ったり、布の上に乗るなど、布から想起される様々な表現に興じるワークがあった。受講学生はそのワークを参考に、青いビニール袋を貼り合わせて作成した大きな「海」を使った表現遊びを考案した。

WS実践では、初めはビニールを出さずに、動物の表現遊びを行い、徐々に海の生き物へと題材を変えていった。海の生き物というテーマが定着した頃合いを見計らって、「海」を広げ、海の中をあらわした。

多くの子どもたちは、突然現れた大きな「海」に、海の生物の表現という活動内容を忘れてしまい、ビニールに向かって跳び回っている姿が見られた。このことで題材との乖離が生じてしまい、今後の課題となった。しかしビニールに対する反応は非常によく、ビニールの動きや音に身体で反応し、躍動感が高まった。題材を忘れてビニールと「戯れる」ことも、即応的表現のあらわれだといえよう。

③リズムダンス

WSでは、受講学生が制作した衣装を子どもたちに着用してもらった。「あいうえおんがく」⁶および「ぼくらは小さな海賊だ!」⁷の二つのダンスを用いた。いずれの音楽にも規定の振付が存在するが、振りの数を減らす・繰り返しを多用・複雑なステップや上肢の動きを単純化する等の工夫を行い、難度を下げた。

また、一つ一つの振付に比喩的な「あだ名」をつけ、親しみやすさと覚えやすさをはかった。(例：拳を天井に向け、肘の曲げ伸ばしをする動きでは「ちからもち」と名付けた) WSでは、受講学生に合わせて子どもたちも「あだ名」を叫ぶ様子が見られた。動きと声をとともにすることで、より一体感が感じられるダンスとなった。

また、「ぼくらは小さな海賊だ!」の活動に入る前に、受講学生が海賊になりきって言葉かけを行い、直前の海の表現遊びから海賊という題材につなげていった。

④2017年度のWSの振り返り

WSが保育施設での身体表現活動とは異なる指導の場であることを生かし、①-③の通り様々な試行を行った。特に「ダンス保育園!!」見学により、受講学生は身体表現指導に関する多くの知見を得ることができ、表現遊びのアイデア考案につながったことはひとつの成果である。

2回のWSともに、主催側より満足度の高い充実したWSであったとポジティブな評価を得、特に2回目のWSである中野区健康づくりフェスタでは、次年度以降の継続につながった。

受講学生との対話を通して行なったWSの振り返りでは、主に以下のことが課題として挙げられた。

○異年齢グループでの実践

幼児にあたる年齢を対象としていたが、発達に大きな差の生じる幼児期において、異年齢数十名に対しての活動立案は難しいことがわかった。特にリズムダンスでは、振付の難度を下げたが、低年齢児にとっては難しく、年長児にとっては易しすぎている。

リズムダンスとは異なり、表現遊びでは自由な表現を行うことができるためか、年齢の差異に関係なく、皆が楽しんでいる様子が見られた。

○保護者の参観

「保護者が見ていたので、(実習とは異なり)難しかった」という声が複数聞かれた。特にWS前は、保護者参観に対して憂慮していた様子であった。受講学生は、保育実習と教育実習を一通り経験しているものの、保護者の前で実践を行うことは初めてであり、不安に感じるのはいやむを得ない。しかしながら、保育現場では保護者による保育参観は必須であるため、WSにて保護者参観の実践を踏めたことは良い経験になったと考える。WSの実際では、受講学生は保護者の視線を感じる余裕が無いほどに指導に徹していた。

○身体活動の運営の難しさ

幼児の活動では計画通りの時程で進めることは難しい。予測できないことが起こった際に、どのように時間をマネジメントするのかは大きな課題である。振り返りでは、「実践前は時間が余ると思っていたが、いざやってみると時間が足りなくなった」・「想定外のことに時間がかかってしまった」などの声が多数聞かれた。受講学生たちは、不測のケースに苦勞していた様子であったが、チームワークを生かして互いに協力しながら、臨機応変に対応していた。この困難を乗り越えたことは受講学生

にとって、「皆でフォローし合いながらWSを行ったことは、非常に良い勉強になった」との気づきがあった。

複数の指導者による体制は、保育現場においても特にイベント指導の場でとられている。WSを通して、役割を分担し協働しながら指導を行う貴重な経験ができたといえよう。

【2018年度】

前年度のWSにて敷かれたWS構成の布石を踏襲しつつ、2018年度の受講学生と前年度の課題を共有し、新たな試行を取り入れた。

①導入 「からだで自己紹介」

前年度と同様に、専門性を持たせた導入を試みた。2018年度では、受講学生一人ずつの自己紹介を身体を駆使して行った。「私の名前は〇〇です」と口頭で述べた後、名前の文字（ひらがなもしくはカタカナ）をからだ全体で描くダンスを行った。

②紙芝居を用いたウォーミングアップ

体操に関する紙芝居を用いてからだほぐしを行った。紙芝居の中の体操を皆で実践し、紙芝居の世界を体験しながら身体活動につなげていった。

③音による表現遊び

2018年度の受講学生は、音楽系のゼミナールに所属し、研究している学生が多かった。そのため、音のイメージから身体の動きを開発できるような活動を提案した。

前年度と同様、動物の表現遊びを行なったが、複数の楽器を用いて題材となる動物をそれぞれ音で表現する工夫を取り入れた。このことにより身体と音による複合的な表現遊びを目指した。

多様な音を演奏したが、子どもたちの動きは音から想起した自由な表現というよりは受講学生の模倣に留まってしまい、課題が残された。

④ビニールの中での自由な表現

2017年度と同じ大きなビニールを用いたが、「海」という題材を提示せずに、子どもたちに自由にビニールと戯れてもらった。動物の表現遊びでは穏やかに活動していたが、ビニールが現れることで急激な動きに変化した。また、ビニールの高さに変化をつけ、波を作ることで、子どもたちの動きのバリエーションを豊かに広げていった。

⑤リズムダンス

2017年度と同様、受講学生が制作した衣装を子どもた

ちに着用してもらった。「夢をかなえてドラえもん」⁸の音楽を使用して、受講学生がエアロビックダンスのステップを応用して創作したダンスを踊った。2018年度の参加児童は低年齢児が多かったことを鑑み、すぐに踊れるような簡単な振付を行なった。そのため短時間の練習で集中力が切れることなく、踊りを楽しむ様子が見られた。

⑥2018年度のWSの振り返り

2017年度に初の試みを行ったWSの構成が一定の成果を得たため、2018年度もその構成を踏襲した。2018年度のWSでは、冗長にならないよう活動内容を増やし、表現の世界に目まぐるしく没入させるような試みを行ったが、子どもたちは集中力を保ちながら、楽しむ様子が見られた。

特にからだがほぐれてきた中盤に取り入れた表現遊びは、後半のリズムダンスに大いに寄与した。リズムダンスの律的な運動にさらに情緒的身体性が加味されていた。

受講学生との対話を通して行なったWSの振り返りでは、主に以下のことが課題として挙げられた。

○伝えたいことの言語化と身体化

WSのリハーサルを行う際、受講学生は、言葉主導で多くのことを語って説明が長くなり、さらに学生自身の身体の動きが鈍くなってしまったことがあった。受講学生も「どこまで説明的になれば良いかわからなかった」との反省が聞かれた。保育経験が浅いことに加え、伝えたい情報の多くを言語化してしまう傾向があるからだろう。言葉で伝えることと身体の動きを通して伝えることを区別化し、整理することの必要性を感じた。

○リズムダンス指導における左右反転

振付の指導では、子どもたちと関わりを持ちながら指導するためにも対面して行う必要がある。その際、指導者は左右反転の振付を踊らなければならない。ダンスを創作し、その練習をして完成度を高めた後に、さらに左右反転の振付を覚える作業が必要になってくるのである。複数の学生から「左右逆の振付を覚えなといけなかったので大変だった」という所見が聞かれた。

○音を活用した表現遊びの難しさ

聴覚的にも表現を楽しめる創意工夫を行ったが、前述の通り課題が残った。予想に反して、音から想起される自由な表現が表出されず、子どもたちは受講学生の動きの模倣に留まってしまった。表現の創造性を高めて広がりを持たせるための時間や言葉かけが十分ではなかった

と考える。音の表現について今後さらに模索する必要を感じた。

3. まとめ

以上、2年度に渡り身体表現指導の専門性を高める取り組みを経て、受講学生は実践的で主体的な学習を行うことができた。

エアロビックダンスのステップを応用したリズムダンス創作では、身体の二元化という課題があるものの、新たなリズムダンス創作法のひとつとして学びを得ることができた。

創造的で自由な身体表現の指導法では、「ダンス保育園!!」見学を通して、後のWS実践につながる表現指導の題材を学ぶことができた。専門家による現場実践を見学することの意義は高いと考えられる。

音楽・衣装に関する実践的な学びでは、保育現場を視野に入れた作業を行い、表現活動を豊かにするための手法を学ぶことができた。しかし、習熟のための十分な時間を確保することができなかつたため、今後の取り組みの際には、学習内容の精査が必要となるであろう。

WS実践では、指導計画の立案から実践までのプロセスの中で非常に重要な学びを得ることができた。各活動をどのように繋げていくのか、子どもたちに表現を楽しんでもらうにはどのような言葉かけが必要なのか、ダンスをどのようにわかりやすく指導すれば良いのか等、保育実践を行わなければ学ぶことのできない課題に多く直面し、研究を深めていくことができた。

また、WSでは保育者というよりも身体表現の専門家である「ダンスのおにいさん・おねえさん」として子どもたちの前に立つ、その意義について考えることができたのも本プログラムの特筆すべき点であると考えられる。

4. 結語

本プログラムは、身体表現に関する専門的な学びを中心に据えた。WSでの保育実践を要として、保育現場に応用できる専門的な知識や技術を養うための取り組みは一定の成功を納めたと考える。

本プログラムを通して一通りの知識や技術を修めることができたが、身体表現指導の根幹となる課題が依然として残されているように感じる。それは、言葉かけに依らない「雄弁な身体」⁹を獲得することである。これは口よりも多くを語り、情報を円滑に伝えられる身体を指す。

人間は言語・聴覚よりも視覚から多くの情報を得ているというのは周知の事実である通り、非言語コミュニケーションである身体表現において、指導者の動きや所

作は重要である。言葉を尽くして伝えても、子どもに理解してもらうことは難しい。「語彙力、生活経験の少ない子どもにとっては、言葉を中心としたかわりには伝わりにくい」¹⁰からである。

どんなに言葉を尽くして伝えていても、そのことが指導者の身体で視覚的に表現なされていなければ言葉かけは意味をなさないだろう。例えばリズムダンスの場合は、正確に踊ることはもちろん、頭から足先まで全身を駆使して伸びやかに動くことが必要である。

また、創造的な身体表現においては、言葉で伝えることが難しいことも多い。「雄大な身体」があれば「もっとこんなふう」「こんなこともできるよね」などのように、抽象的な言葉を用いながら身体で示すこともできるだろう。

本プログラムを通して、実践的で有意義な学びが得られたが、「雄弁な身体」獲得のために身体で伝えられることは何かを追究し、学生自身の表現技能を高めていく必要性が示唆された。そのためには、プログラムを通して身体表現指導の場数を多く踏むことはもちろんのこと、学生自身が日々自己を解放して躊躇なく表現できるように学生生活全体の支援も試みていきたい。学生一人ひとりに寄り添った関わりを持つことで、彼らの開かれた心と身体を導き出せるのではないかと考える。



写真1：2017年度なかの健康づくりフェスタにおけるWSの様子



写真2：2018年度なかの健康づくりフェスタにおけるWSの様子

注

- 1) 本プログラム名は、2017年度は「キッズダンスマイスター」であったが、2018年度より「身体遊びマイスター」と改称した。本稿ではプログラム名を「身体遊びマイスター」と統一することとする。
- 2) 増田未来・松岡綾葉「幼児の身体表現における外部講師の役割」, 淑徳大学短期大学部研究紀要第56号, 2017, 165 p
- 3) 田辺圭子「体育授業におけるエアロビックダンスについて」北陸学院短期大学紀要第32号, 2000, p 29
- 4) 松岡綾葉「エアロビックダンスのステップを用いた幼児のリズムダンス創作の検討」, こども教育宝仙大学紀要第9号(1), 2018, p 39
- 5) ダンス保育園!! ウェブサイトより
<http://www.dancehoikuen.com/about/>
(2019年11月1日参照)
- 6) 作詞・作曲 GReeeeN
- 7) 作詞: 佐藤弘道・谷口國博 作曲: 谷口國博
- 8) 作詞・作曲 黒須克彦
- 9) 松岡綾葉「アーティストによる学校ダンス教育—「ダンス教育ラボ」における言説から—」, こども教育宝仙大学紀要第8号, 2017, 79 p
- 10) 猪崎弥生・山田悠莉他「乳幼児のダンス ABC」, 一二三書房, 2013, 57 p

謝辞

本プログラムの貴重なWS実践の機会を下さったなかのゼロおよび中野区のご担当の皆さま、見学の機会をくださった「ダンス保育園!!」の住吉智恵様に感謝申し上げます。また2018年度では、本学教授の宇佐美かおる先生にはWS監修・引率に関して大変お世話になりました。ここに改めて感謝申し上げます。